

令和 5 年度 在外研究員 報告書

所 属	都市情報学部 都市情報学科	職名・氏名	准教授 田口 純子
調査研究題目	子ども・若者に向けた近現代建築遺産ワークショップの開発		
研究先国	アメリカ合衆国	研究機関	イリノイ工科大学 建築学部
研究期間	令和 5 年 8 月 1 日 ~ 令和 7 年 7 月 30 日		

1. 研究の背景と目的

2000 年代以降、戦後に建設された近現代建築の解体が世界各地で進んでいる。築 50~70 年を経た建物を現代の環境性能・構造性能に適合させつつ、文化資源として活用するためには、専門家の知見が不可欠である。しかし同時に、市民、とりわけ将来の建造環境の担い手である子どもや若者の主体的参加を促すことも重要である。

国際学術団体 DOCOMOMO International は 2022 年に教育憲章を発表し、専門家や学生のみならず市民・子どもを含む多様な層への教育の推進を掲げた。しかし現状では、学生・専門家向けの教育に比べ、市民や子どもを対象とした教育実践は限られている。こうした課題を踏まえ、本研究では子ども・若者を対象に、近現代建築遺産に対する関心を高めるワークショップの開発と評価を目的とした。

2. 研究機関と滞在概要

筆者はシカゴのサウスサイドに位置するイリノイ工科大学 (Illinois Institute of Technology: IIT) 建築学部の博士課程プログラムに客員研究員として滞在した。

シカゴは 1871 年大火後の再建を契機に高層建設技術や建築のモダン・ムーブメントを発展させた都市であり、豊かな建築文化をもとに市民や子ども向けの建築教育活動も豊富に展開してきた。共同研究に必要な資源が揃っていたため、滞在先に選定した。

令和 5 年 8 月の研究開始後、新型コロナウイルス感染症収束後の社会変化の影響で計画変更を余儀なくされたが、IIT 建築学部、同地域連携局、シカゴ建築センター、DOCOMOMO シカゴの協力を得て研究体制を再構築した。地元校との関係構築に時間を要したため、研究期間を令和 6 年 7 月から令和 7 年 7 月まで延長し承認された。



図 1 シカゴ建築センター主催のリバークルーズ
両岸に建つ高層ビルの解説から、シカゴの歴史や建築の意匠・材料・構造等の発展を学ぶ。観光客や地元
のシカゴアンにも人気のボートツアー。Docent と呼ばれる市民ガイドの研修も見学させて頂いた。

3. 研究内容

研究の主軸として、シカゴ公立学校と連携した対話型ワークショップを開発・評価した。連携校はシカゴのサウスサイドに位置する Dewey School of Excellence (中学校、8 年生の科学クラスが参加)、James R. Doolittle Academy (中学校、6~8 年生の選抜チームが参加)、ACE Amandla Charter High School (高校、9 年生の建築設計・施工合同クラスが参加) の 3 校で、あわせて中高生 80 名以上が参加した。

題材としたのは、サウスサイドにおける戦後の IIT キャンパス拡張と、その過程で建築学部の校舎クラウン・ホール建設のために取り壊された集合住宅メッカ・フラッツの歴史である。都市更新政策によりアフリカ系アメリカ人を中心とする地域社会が被った犠牲と、近代建築の空間的価値を併せて学ぶことにより、建築の功罪を多面的に捉える力を養うことを目的とした。

カリキュラムは STEM 教育と連携して、全 10 回 (12 時間程度)、以下の段階で構成された。

1. 歴史紹介:メッカ・フラッツとクラウン・ホールの関係を学び、都市開発と住民移転の問題を議論。
2. 地域調査:中高生がチームでサウスサイドにある地域の社会・空間史を調査。

3. キャンパス訪問: IIT 大学院生の案内により、建築観察と学生生活体験を行う。
4. デザイン提案: 地域と大学を結ぶ新たな施設や空間を、CAD 等を用いて構想。
5. 成果発表・展示: 校内発表を経て、IIT キャンパスでの合同展示を実施。

成果として、中高生たちはホームレス支援施設、保育所、キャリア訓練拠点、図書館、公共住宅など、地域の課題を踏まえた多様な設計提案を行った。これは単なる建築教育にとどまらず、地域社会に向けた自己効力感や市民主体性を涵養する契機となった。

また、ワークショップに参加した IIT 大学院生にとっても、自らの研究や専門性を地域社会に還元する教育的役割を認識する重要な機会となり、世代間協働の意義を再確認することができた。

4. 大学教育への貢献

修士・学部教育では、IIT 建築学部において「Modern Architecture in Japan/Asia」セミナーを開講し、延べ約 50 名が履修した。学生は文献や映像資料を通じて日本の近代建築を学び、自らの経験やシカゴの近代建造環境と比較しながら批判的考察を行った。さらに、中高生との共同展覧会に向けて成果を社会に発信する方法を模索し、世代間の教育的接続を意識した学習を展開した。

博士課程教育では、12 名の学生との研究ディスカッションや異文化交流を支援した。また、2023 年には IIT 博士課程シンポジウムで研究発表を行い、その成果をプロシーディングスに掲載した。

5. 研究成果発表

研究成果の社会的発信として、以下を実施した。

1. 論文発表: 2024 年 6 月、DOCOMOMO US シンポジウム、2026 年 3 月で発表、DOCOMOMO International 国際会議(採択済)で発表予定。さらに、学術誌に原著論文を投稿中。
2. 展示活動: 2024 年 5 月、IIT 建築学部オープンハウスにて研究成果展示を実施。2025 年 5~6 月には IIT の Paul V. Galvin 図書館において 1 か月間の展示を行い、中高生と大学院生による共同制作の成果を公開した。展示初日にはシカゴ公立学校の中高生と教員、保護者、IIT の教員と学生、ゲストを含めた 50 名以上が参加し、成果発表会を開催した。研究・教育・地域連携を結びつけた展示により、近代建築遺産を世代間学習の資源として再解釈し、社会的意義を広く共有することができた。



図 2 シカゴ公立学校生徒の IIT キャンパス訪問 Dewey School of Excellence 8 年生科学クラスの先生、生徒、IIT の大学院生と一緒に。5~8 学年科学担当の Dixon 先生は STEM 教育と建築教育の融合をテーマに、筆者と共同で教材開発や論文執筆を行なった。



図 3, 4 シカゴの中高生・大学院生と共同制作した展示 2025 年 5 月 20 日~6 月 30 日(延長含む)。シカゴ公立学校と連携した対話型ワークショップの成果と、IIT での日本近代建築史セミナーを受講した大学院生の成果を共同展示した。

6. 今後の展望

在外研究の成果をもとに、今後は以下の展開を予定している。

第一に、日本への成果還元として、国内の近現代建築に関する教育で、子ども・若者を対象とし、本研究の知見を応用する。具体的には、日本の中等教育や地域文化施設との連携を図り、シカゴで得られた対話型教育の枠組みを翻案したプログラム開発を行う予定である。

第二に、大学院生・学部生との教育的接続を強化する。具体的には、大学生による中高生への学習支援や共同展示企画を拡充し、まちづくりに教育的視点から貢献できる人材の育成や大学カリキュラムの開発を目指す。

第三に、研究成果の国際的発信を進める。査読付き論文の投稿・発表を継続するとともに、教育憲章や都市政策につながる議論を活性化し、国際的な教育実践研究のネットワークを充実させる。

これらを通じて、近現代建築遺産を単なる保存対象にとどめず、未来の社会を担う世代にとっての学びの資源として位置づけ直すことを目指す。名城大学の担当講義・演習にこれまでの研究成果や今後の展開を活かしていくとともに、展示企画・制作や地域連携の経験も学生教育に取り込んでいきたい。

発表論文

- Junko Taguchi, Developing Advocacy Capacity in Teenagers Towards Equitable Urban Landscape, Prometheus: Journal of PhD Program in Architecture, IIT College of Architecture 7, p.121, 2024
- Junko Taguchi, Pedagogy and the Paradoxes of Modern Architecture in Chicago's South Side, 2024 DOCOMOMO US National Symposium, University of Miami, 2024
- Junko Taguchi, Michael Dixon, STEM Meets Modernism: Youth Engage Chicago's Complex Built Legacy, 19th International DOCOMOMO Conference, University of Southern California, 2026 (発表予定、採択済)

謝辞

在外研究受入教員である IIT 建築学部の Michelangelo Sabatino 教授・博士課程プログラムディレクター(当時)および同地域連携局の Alicia Bunton 副局長には、研究滞在への温かいご支援と地域連携にご協力を賜り、深く感謝いたします。展示制作やワークショップにご尽力いただいた IIT の修士課程・博士課程の学生の皆さんにもお礼申し上げます。

また、6～9年生向け STEM カリキュラムの共同開発に重要な貢献をくださった Michael Dixon 先生と、彼が担当する Dewey School of Excellence の 8年生科学クラスの生徒の皆さん、James R. Doolittle Academy の Joan Dameron Crisler 副校長および 6～8年生チーム、さらに ACE Amandla Charter High School の 9年生建築設計・施工合同クラスを担当した Uriel Gutierrez 先生、Briana Stewart 先生とその生徒の皆さんにも、サウスサイドの居住者の視点から多くの学びをいただき、心よりお礼申し上げます。ご協力いただいたすべての校長先生や保護者の方々にも感謝いたします。

さらに、資料提供や助言をくださったシカゴ建築センター、DOCOMOMO シカゴ、DOCOMOMO ジャパンの皆様のご協力にも深く感謝いたします。本研究は人を対象とする研究であり、IIT IRB (IRB-2024-51) およびシカゴ公立学校 RRB (2024-1921) の承認を得て実施されました。

最後に、名城大学都市情報学部の教職員の皆様、関係部署の教職員の皆様、担当講義の非常勤講師としてご協力くださった先生方等のご支援により、長期間の在外研究を実施することができました。紙面の都合上すべての方のお名前を挙げることはできませんが、ここに改めて感謝の意を表します。